

クロスロードゲームの作問における 語り直しに関する研究

田中 尚人¹・高良 幸作²・坂井 華海³

¹熊本大学 熊本創生推進機構 准教授

²熊本大学大学院 自然科学教育部 博士前期課程

³熊本大学大学院 自然科学教育部 博士後期課程

災禍の激甚化・頻発化などにより災害に対する日常からの備えが必要とされる一方で、2016年の熊本地震からは丸五年が経ち、記憶の風化が懸念されている。災害や復興のプロセスにおける記憶の継承は重要な活動であるが、単に記録を保存するためのアーカイブでは、持続可能な記憶の継承活動は難しい現状にある。本研究では、災害時や復興過程における記憶や経験を語り継ぐために、語り直しの意義について考察することを目的とした。具体的には、熊本地震を対象とした防災ゲーム「クロスロード」の作問ワークショップを語り直しの場と捉え、熊本県下の3自治体にて実施し、その作問内容について分析した。研究の結果、語り直しは4つに分類され、主体が「伝えたい」という意志を持つことが重要であることが分かった。

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

2016年に二度の震度7の地震が引き起こした熊本地震災害や2020年に起きた球磨川流域を中心とした豪雨災害、そして世界的なcovid-19蔓延による災禍の激甚化、頻発化などにより、ますます災害に対する日常からの備えが必要とされるようになっていく。しかし、2016年の熊本地震からは丸5年、2020年7月に起きた県南の球磨川流域を中心とした令和2年7月豪雨災害からは1年半しか経っていないにも関わらず、記憶の風化が激しい。

災害時や復興過程における記憶や経験の保存は重要であるが、次の災害に対する「備え」として、これらの実践知が活用される必要がある。そのために記憶や経験を保存し、活用するアーカイブが重要となる。しかし、アーカイブも近年デジタルアーカイブや、防災学習旅行など積極的に活用施策が提案されているが、市民が能動的に関わる段階には至っていない。記憶の風化に加え、災害やその復興について語ることは、語り部でなくとも被災者にとっても難しいこととされ、災害を経験していない非被災者にとっては、よりハードルの高い行為であると思われる。特に若年層の語り部

は少なく，その立場での災害に関する記憶や経験を継承する意義は大きいと言える。

そこで本研究では，災害時や復興過程における記憶や経験を語り継ぐために，語り直しの意義について考察することを目的とした。具体的には，熊本地震を対象とした防災ゲーム「クロスロード」の作問ワークショップ（以下，WSと略）を語り直しの場と捉え，熊本県下の3自治体（熊本市，菊池市，あさぎり町）にて実施し，その作問内容について分析した。

(2) 基礎的概念の整理

本研究で用いる，基礎的概念を整理した。

a) シビックプライド

本研究では，記憶の継承に付随する重要な概念として「ふるさと」や「シビックプライド」の概念を用いる。シビックプライドは伊藤ら^{1) 2)}が「都市に対する市民としての誇り」と定義している。これまで，シビックプライドに通ずる地域愛着の形成要因に関わる知見が蓄積^{3) 4)}されており，地域理解が地域愛着の醸成について重要な役割を果たすことが指摘されている⁵⁾。本研究では，シビックプライドを「市民が地域や都市に対して持つ，愛着や誇り，自負」と定義する。

b) ナラティブ

ナラティブとは「物語，語り」と訳される概念であり，Polkinghorne⁶⁾は，①物語を作る過程，②物語の認知的枠組み，あるいは③stories, tale, あるいはhistoriesとも呼ばれる物語を作る過程の産物，のいずれかであるとしている。野口⁷⁾は「具体的な出来事や経験を順序だてて語る行為，および，その産物を同時に表す言語行為の一形態」と定義し，行為としての「語り」と，産物としての「物語」を使い分けている。やまだ⁸⁾はナラティブと互換的に用いることが多いとし，「物語」を「二つ以上の出来事を結びつけて筋立てる行為」と定義し，行為として注目している。河合⁹⁾も「何かと何かをつなぐ役割をもっているとともに，何かと何かがつながることから生まれてくる」としている。ナラティブ（物語，語り）は「つなぐ」ことに本質があり，産物としての「物語」だけでなく，出来事をつなぎ「経験を組織化し，意味づける行為」¹⁰⁾として重要と言える。

c) アクションリサーチ

本研究では，研究者と当事者（WS参加者）との協働的実践により展開されるという点で，アクションリサーチ^{11) 12)}の側面を持つ。矢守ら¹³⁾や宮本ら¹⁴⁾の研究では，当事者が地域の問題解決ために研究者と協働するとき，独特の複雑性が存在すると指摘している。宮本はそれを「アクションリサーチのパラドクス」と定義している。

本研究では，誰もが記憶の継承者として語り直す場としてクロスロードの作問に着目し，物語る際の実践知に着目している。矢守は『「Days-Before」の語りに関する理論的考察』¹⁵⁾において，被災者が災害が起こった前日について語り直す『一日前プロジェクト』に触れ，災害前の日常を語り直す重要性を指摘しているが，もちろん，過去から現在までの歴史を知ってしまった自分にとって，過去の自分は自分ではなく，他者と言える。語り直しは，当事者にとっても過去の自分という他者との協働実践による実践知の獲得である。

(3) 語り直しの定義

本研究では、語り直しを「何かを契機として、自分や他者の体験を言語化し伝えること」と定義した(図-1)。「言語化し伝える」ためには、語り直しの主体(語り手)にとって語り直す記憶や経験が誰のものであっても、相手に伝わるように客体化して物語化することを意味する。語り直しは、語り手と聞き手の協働行為である。過去の自分の記憶や経験を語り直す場合でも、他者と同様に協働実践として取り扱うことが可能である、と考えた。

語り直される記憶や経験には、他者との経験や共通体験として得た内容も含まれ、自らの経験以外も含まれている。語り直しは、その時、その場所で誰との共通体験なのかによって記憶が構築され、語りが変化すると言える。長田¹⁶⁾の場の定義を参考に、本研究では語り直しの場を、時間、空間、人間(仲間)の三つの間によって構成されるとした。

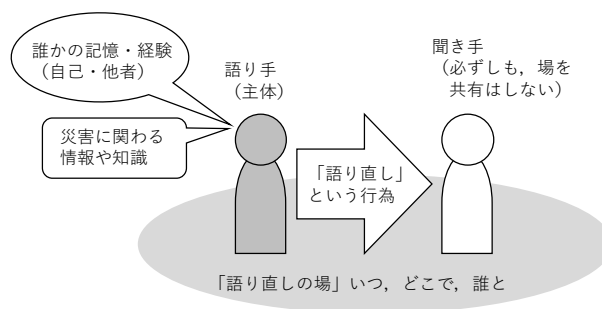


図-1 語り直しの場のイメージ図

2. クロスロード作問ワークショップ

本章では、クロスロードゲームの作問WSにおいて、WSの参加者によって作問(語り直された記憶や経験)内容と語り直しの主体との関係性について明らかにした。

(1) ワークショップの概要

a) クロスロードゲーム

クロスロードゲーム(以下、CRと略)とは、阪神・淡路大震災時に災害対応に当たった神戸市職員へのインタビューをもとに作成されたカードゲーム形式の防災教育教材である。2004年に矢守らのチームによって作成された。このゲームは災害時の様々な局面で経験される「あちらを立てれば、こちらが立たず」というジレンマを素材として作成されている。

CRの問題は、プレイヤーが誰でもジレンマを「自分ごと」として受け取ることができるように、抽象度を高めるため記述方式に統一性を持たせている。記述内容は、①意思決定者の立場、②100文字程度で抽象的な状況を描写する本体部分、および③YES/NOの2つの行動選択肢である。ゲームの参加者は、カードに書かれた設問を自らの問題として考え、二者択一の設問にYESまたはNOのカードを示してから、答えを選択した理由を同じグループのメンバーと共有する。この設問には一般的には正解はないとされ、それにより災害対応を自らの問題としてアクティブに考えることができ、かつ自分とは異なる人々の意見や価値観にも気づくことができる、という特徴を有する。

矢守¹⁷⁾によると2004年に作成されたCR神戸編以降，中越地震や東日本大震災の体験をベースとしたものや，感染症対策や学校安全対策，さらには生活環境問題など当初の守備範囲であった自然災害に対する防災とは異なる課題について扱ったものが続々と作成されている

b) ワークショップの設計

WSでは，①災害やCRに関する事前／事後アンケートと②クロスロードゲームの作問，を行った。

①事前／事後アンケート

クロスロードの作問という語り直しの場を体験したことによる変化や要因を分析するために実施した。事前アンケートに関しては，作問の背景を理解するため，作者の記憶に残る災害に加えて，なぜその災害が記憶に残っているのかを問うた。さらに熊本地震時の記憶について回答してもらった。事後アンケートに関しては，作問意図を確認するために，Q2を聞いた。さらに，語り直しの場について考察するために，Q3を問うた。

【事前アンケート】

Q1：あなたが記憶に残る災害と，その理由を教えてください。

Q2：防災ゲーム「クロスロード」について知っていますか？

Q3：熊本地震発生時（2016.4.14，4.16）あなたは，どこで何をしていましたか？

【事後アンケート】

Q1：災害のことを語る（話す）場に参加して，学んだことや大事だと感じたことはありますか？

Q2：あなたが作問した問題において，一番伝えたいことは何ですか？

Q3：クロスロードを作問してみて，新しい学びや発見，気づいたことを教えてください。

②クロスロードゲームの作問

被災経験の有無に関わらず，過去の自らの経験や他者の経験，ニュースや書籍などの情報を統合し，クロスロードの問題をつくることを通じて，過去の記憶や経験を言語化することで語り直しを行っていると考えた。事前／事後アンケートと合わせて分析することで，語り直しの場について考察することを考えた。

(2) ワークショップの実施概要

WSの実施地（図-2）は熊本市，菊池市，あさぎり町とした。熊本市は，「熊本地震の被害を大きく受けた中核都市」，菊池市は，「熊本地震で被害があったものの被害が大きくなかった地方都市」，あさぎり町は「熊本地震については被害が少なかったものの，令和2年7月豪雨も起こっている中山間地域」であることを考慮して対象地とした。WSの対象者は，熊本地震の被災経験の有無に関わらず幅広い年代，属性を考

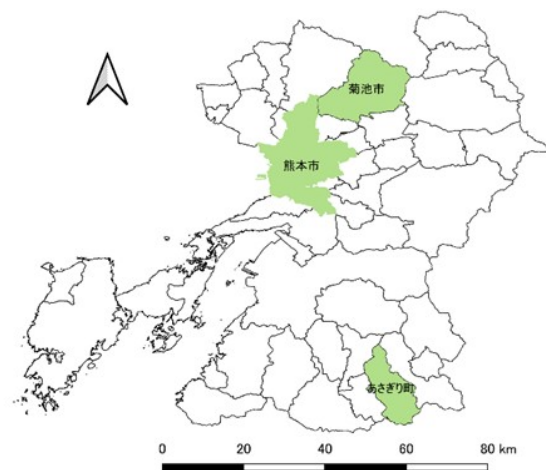


図-2 作問WS実施自治体

慮することで、語り直しの内容の聴取や語り直しの場の変化を総合的に分析することができると考えた。以下に、対象地の概要と対象者の属性を述べた。

a) 熊本市

熊本市¹⁸⁾は熊本県の西北部に位置する。金峰山を主峰とする複式火山帯と、これに連なる立田山等の台地からなり、東部は阿蘇外輪火山群によってできた丘陵地帯、南部は白川の三角州で形成された低平野からなっている。土地利用状況は、田畑が約34.4%と一番割合が高く、次に宅地が約22%を占める。2015年の人口は740,822人で高齢化率が約24.1%である。また、農業就業人口は10,435人である。熊本市は、熊本県の県庁所在地で、2012年に政令指定都市に制定された。

熊本市では、くまもとクロスロード研究会のメンバー5名を対象とし、2021年12月4日にWSを実施した(写真-1)。くまもとクロスロード研究会は、熊本で起こった二度の強震での経験を傳承するために2017年5月16日に発足した。熊本地震を後世に傳承していきたいという思いを持った方が多いことを踏まえ対象者として有効だと考えた。参加者は、5名中4名は熊本地震を経験しており、1名は熊本市内では熊本地震を直接経験していない。



写真-1 熊本市におけるWSの様子

b) 菊池市

菊池市¹⁹⁾は、熊本県北東部に位置する。北部の八方ヶ岳から東部の阿蘇外輪山の鞍岳まで山岳が連なり、地域の大半を森林が占めている。それら山岳からの豊富な水が菊池川本流をはじめとして迫間川、河原川、合志川に流れており、菊池平野を潤し、肥沃な土地を形成している。これらを活かした農林畜産業を基幹産業としており、特に畜産業においては、西日本有数の産出額を誇っている。土地利用状況は、田畑が約25.9%、山林が約37.1%を占める。2015年人口は48,167人で高齢化率は約29.9%である。また、農家人口は8,705人である。



写真-2 菊池市におけるWSの様子

菊池市では、菊池市中央図書館の職員6名を対象とし、2022年1月6日にWSを実施した(写真-2)。参加者6名中、5名は熊本地震を経験しており1名は熊本地震を経験していない。

c) あさぎり町

あさぎり町²⁰⁾は熊本県南部、球磨盆地の中央に位置する。町内を日本三大急流の

一つに数えられている球磨川，国道219号，くま川鉄道が東西に走っている．地勢は，盆地の中央部分を縦割りにする形で町の北と南側が山間部となっており，両側から流れ込む球磨川の支流に沿った形で緩やかな平地を形成している．土地利用の状況としては，森林が約66%，農用地が約19%を占める．2015年の人口は15,523人で高齢化率が32.7%である．農業就業人口は2000年では2,537人であったが，2015年には1,528人と減少傾向にある．

あさぎり町では，あさぎり町役場の保健・福祉部局の職員5名を対象とし，2022年1月14日にWSを実施した（写真-3）．参加者，4名があさぎり町で，1名が玉名市で，熊本地震を経験した



写真-3 あさぎり町におけるWSの様子

(3) 作問の仕方

a) 作問の概要

本研究では，属性や年齢が異なる方々に，クロスロードゲームの問題を作成して頂いた．事前アンケートの記入後，クロスロードを3問程度行ってから，熊本地震を契機とした記憶や体験に関する問題を作成して頂いた．

作成の例として図-3を示した．まず，

- ①「意志決定をする立場」を決める．
- ②本文に100文字程度の伝えたい「ジレンマ」を記述する．
- ③最後にYES・NOの二択を決める．

以上の流れが作問に関する記入方法とする．

さらに，今回の作問WSでは「記憶の継承」に関する作問のため，伝えたいメッセージやジレンマなど，作成した問題に対する説明文や解説文も記入していただいた．

b) 作問ワークショップの結果

WSの結果としてm熊本地震に関する問題は，熊本市では5問，菊池市では6問，あさぎり町では5問，計16問（表-1）となった．

あなたは・・・72歳の農家 ①「立場」を決める

②本文は100文字ぐらい

中山間地の棚田で、お米と自分たちで食べる野菜を作っている。地震で緩んだ地盤が雨季の豪雨で崩れ、田植えしたばかりの田んぼに土砂が流入してしまい、今年は稲作を諦めざるを得ない。都心に住む会社員の息子は「こっちで同居しないか?」と言ってくれている。あなたは、農家をやめますか?

③伝えたいこと「ジレンマ」がある

YES(やめる) OR ④YES/NOの2択

NO(やめない)

図-3 作問の例示

3. 語り直しに関する考察

(1) 作問内容の分析

a) 作問内容の分類

熊本地震を契機としたクロスロードの問題（16問）を，語られている内容が誰のものなのかを整理した（表-2）．

表-1 作問されたクロスロードゲームの問題

対象	立場	本文	解説文
熊本市	熊A 高校生	大地震があり、通学している高校が休校となりました。被災地では大きな損害を受け危険な状況で、災害ボランティアセンターが立ち上がりました。被災地に災害ボランティアに行きますか？ YES (行く)・NO (行かない)	めいがボランティアにいったから、自分が高校生の時は、そのような気持ちにならなかったし、後にも危険なことは、やらされていなかったから、時代の流れが変わってきている、考え方が変わっている。
	熊B 災害ボランティア	大災害が起きた被災地に支援に入ろうと考えている。ちょうど、新型コロナウイルスが流行しており、医療従事者として、働く職場からは「ボランティア活動は控えるように」と言われている。お世話になった方々が多くいる被災地に恩返しがしたいと思っている。こっそり被災地に支援に行きますか？ YES (行く)・NO (行かない)	コロナ禍で、熊本豪雨が起き、複合災害によるリアルなジレンマを被災地の方々にも考えておいてほしい。「こっそり」がポイントかも
	熊C 避難所の運営者	地震後2週間、ここの避難所はだんだんと避難者が減ってきたが、よその避難所はまだまだ避難者が多く大混乱していると聞く。あなたは、よその避難所からこっちに避難するように呼びかけますか？ YES (呼びかける)・NO (呼びかけない)	軒先避難など「避難所に来れなかった人」が多かったのを知っている。その一方で、地震後2週間の地点で「避難所」に呼び寄せる、というのが妥当なのかどうか？ 「熊本地震」でのこと、「東日本大震災」ではどうか。対応した災害によって答えも変わってくる気がするし、そろそろ、あの時のジレンマを解放する頃かなあ。
	熊D ボランティア団体の長	被災地の後は、復興を手伝い続けて早5年、通常の仕事も忙しくなってきた。家族からも「いつまで、そのボランティアを続けるつもりなの？」ときつく言われるようになってきた。あなたは「ボランティアの団体の長」をやめますか？ YES (やめる)・NO (やめない)	正業ではない、ボランティアの長という責任をどのように考えるのか。難しいジレンマだと思う。
	熊E 中学校の教員 (子持ち男性)	学校が避難所になり、4ヶ月運営しなければなりません。日夜交代で学校にいなければなりません。同僚教員の中には、単身で子供を連れてきてほしいかという相談を受けました。震度6弱の地震が発生し、職場に参集するよう指示がありました。子供を連れて学校に行くか行かないか？ YES (連れて行く)・NO (連れていかない)	・男性目線であることをあえて条件に加えたい ・それぞれの家庭状況を想像しながら議論したい ・まだまだ、ジェンダー問題を感じていると考えている ・YES/NOは社会的立場で変わると思うから ・災害時の社会的役割みたいなものを一緒に考えたい
菊池市	菊A 70歳の年金受給者	あなたは、親から譲り受けた家で独りで暮らしています。近くにスーパーはなく、車の免許もありません。地震で半壊した家に住み続けるのが不安なため利便性の良い場所でアパート暮らしをしようと思っている。 YES (引越す)・NO (引越さない)	もしかしたら将来自分の身に降りかかってくる問題かもしれないので
	菊B 避難所の責任者	人員60名に設定されている避難所に100名近くの避難者がおしかけています。他の施設も満員のとき、残りの人も受け入れられますか。 YES (受け入れる) /NO (受け入れない)	廊下や空きスペースを利用すれば雨露は防げるが生活環境としては悪くなる。どちらを優先するか、大きな災害になればなるほど判断力、対応が大事となる。
	菊C 普通の家族の一人	自分は避難したが、家族は家にいたい。どうしますか。 YES (避難する)・NO (避難しない)	実体験だから
	菊D 76歳の一人暮らしの女性	熊本地震で、自宅が半壊し住めなくなりました。建築士の見立てでは、土台や基礎はしっかりして再建は可能だが、500万円の費用がかかります。工事は半年以上はかかるということです。あなたは、家を新築にしますか。 YES (する)・NO (しない)	私の母の実体験です。状況が厳しく人手もないので、自分の改修をするかで迷いました。家族を含めていろいろ検討しましたが、結局、改修したという話です。お金のこと、将来のこと、相続のことなど考えることがたくさんありました。
	菊E 母と2人暮らしの60代女性	地震後、大きめの余震が続いている中、少し離れた地域に住む私の知り合いから「お母さんを数日あずかるよ」と声がかかった。母は疲れているのが迷っている様子。あなたは預けますか。 YES (預ける) /NO (預けない)	熊本地震の時、同じことがあった。高齢な母に対して、どちらが良いかとても迷いました。その時は、まだ本人の意思がはっきりしていたので、本人が決めました。もう少し高齢になった時に子供である私が決断する時が来るだろうと思って作りました。
	菊F 50代の主婦	家には足腰の弱った父がいます。水もガスも止まり、復旧の目処がつかず状況ですが、父は避難を嫌がります。あなたは、無理にでも避難所へ連れて行きますか。 YES (連れて行く) /NO (連れていかない)	高齢者が家を離れたがらないという話はよく聞きますが、現実的に世話する人間の負荷が大きい(地震の際の家族の経験がきっかけ)
あさぎり町	あA 看護師	勤務している病院では、地震の時、何度以上の時は病院に出て行かなければいけないことを言われていました。地震があった時(ニュースを見ると出勤しなければならない震度でした)は自宅でパートナーと保育園に通う子供と過ごしている時でした。パートナーも、緊急時には、職場へ出て行かなければならないこともあります。あなたは、勤務先の病院に出勤しますか。 YES (出勤する) /NO (出勤しない)	自分が病院へ出勤した時には、自宅でパートナーが、子供を見てくれる状況でしたが、私の出勤後、パートナーが出勤しなければいけない時、子供たちは、どうなるかと思い、うしろがみをひかれる思いで出勤したからです。
	あB 食料配布担当者	備蓄の食料が、避難者人数分全然足りなくて、アレルギーや特別食等は多く余っている状況だった。その時、普通食以外の分も配布してしまおうか？しばらくは、食料が入ってこない状況の場合(場所的に支給が困難)。 YES (配布する) /NO (配布しない)	どれくらい、特別食としてとっておいたら良いのか？それとも、今いる人たちに、お腹を満たすことが優先なのか？分配方法 その他の人たちor特別食しか食べられない方を優先したら良いのか？日頃から、その配布やどうするか考えておく必要がある。
	あC 遠方に住んでいる子供	自分の実家が震度5だった。親に何度か電話をかけるが繋がらない。実家までは帰るのに時間がかかる。1人暮らしの親は80代だが元気をしている。役所に安否確認のための電話をかけますか。 YES (役所に電話をかける) /NO (役所に電話をかけない)	熊本地震の時、上記の様な電話が多数あり、包括にいたため対応が大変だった。元気があっても80代一人暮らしであれば、日頃から様子をみてもらえるよう近所などの人たちにも声をかけてつながっててもらえるいいのと思ったことがあったため。
	あD 大学生	大きな地震の後、余震が続いています。他県からきた一人暮らしの友人から「怖いから家に来てほしい」と連絡がありました。あなたは友人の家にいきますか？ YES (いく) /NO (いかない)	実際に1回目の本震の後、友人から連絡が来たので自分はいきました。ただ、合流した後、他の友人からは「危ない」「なんで行くの？」など言われ、自分の危険とパニックを起こしている友人(県外なので頼れる人が近くにいない)どちらを優先すべきか今だにもやもやしている体験だからです。
	あE 役場の保健師	被災後、夜間も交代制で救急担当として夜の勤務が継続している。夜間はほとんど小さな子供のいるスタッフははずしている。しかし、自分たちも疲れが出てきている。小さな子どもをもつ保健師からも「自分も夜待機が可能」と言ってくれている。今後、シフトに小さな子どもを持つ保健師も入れてはどうかとスタッフたちに提案するか？ YES (提案する) /NO (提案しない)	限られたスタッフの中で、自由の身である自分が他の被災地の派遣等、本当はきついのには我慢してやらないといけない場面がある。災害が続くと、いつまで自分の体力がもつか...と不安になることもある。働きやすい職場になればいいなと

表-2 クロスロードの問題で語られた記憶や経験の所在

地区	対象	立場	問題概要	事後アンケートQ2. 一番伝えたいこと	誰の経験
熊本市	熊A	高校生	災害ボランティアに行く？	今の若者はとか、昔はこうだったとかいう方々に、現状での若者の素晴らしさを知ってほしい	他者の実体験（妊）
	熊B	災害ボランティア	コロナ禍で知り合いのところにこっそりボランティアに行く？	どこでも起きかねない問題でもあり、どこかで難しい立場の人がいると知ってほしい。	自己の体験
	熊C	避難所の運営者	避難所の移動を勧める？	「熊本地震」の体験を一般化することの難しさ。	自己の実体験
	熊D	ボランティア団体の長	いつまでボランティア団体の長を務める？	ジレンマの措置は、複雑に絡み合っている。①ボランティア ②“長”という役割の難しさ	自己の体験
	熊E	中学校の教員（子持ち男性）	避難所運営に子どもを連れてくる？	立場を考えて、なりきって考えて話してみる	他者の体験
菊池市	菊A	70歳の年金受給者	一人暮らしを続ける？	おひとりさまの最後	自己の体験
	菊B	避難所の責任者	キャパオーバーの避難所どうする？	指示系統や誰が判断したかで問題が左右されると新たに発生することも覚悟する必要がある。	自己の実体験
	菊C	普通の家族の一人	自分と家族の避難のギャップ？	状況は変わる、葛藤と向き合うことをいとわない	自己の実体験
	菊D	76歳の一人暮らしの女性	自宅の修復どうする？	家族や地域や人間関係、お金のこと、年齢のこと、様々な要素が複雑にからみあっているということ。	他者の実体験（母）
	菊E	母と2人暮らしの60代女性	母を数日預ける？	高齢者の人口が増加している中、その子供が判断する機会が増えてくると思う。	自己の実体験
	菊F	50代の主婦	父を避難所に連れて行く？	日常の時から、災害時の（最悪な）シミュレーションをして、家族と共有しておいた方がよい	他者の実体験（家族）
あさぎり町	あA	看護師	子どもを残して出勤する？	仕事への使命感と守らなければならない家族について	自己の体験
	あB	食料配布担当者	特別な食品も普通食として提供する？	いろんな災害やそのケースを想定して、みんなでイメージを共有し、備えることが大事	他者の体験
	あC	遠方に住んでいる子供	一人暮らしの母の安否確認の電話をする？	被災した時に、慌てなくていように日頃から準備しておくことが、災害時だけでなく安心できる生活につながる	他者の実体験（相手）
	あD	大学生	被災地の友人の家に行く？	その人がもつ重要性は人によって違うこと	自己の実体験
	あE	役場の保健師	子どものいるスタッフにも勤務してもらおう？	出来ないことは出来ないと言える職場と言える勇気を持ちたい	自己の体験

16問において、誰の記憶や経験が語り直されていたのかを整理すると、①自己の（熊本地震の時の）実体験、②自己の体験、③他者の（熊本地震の時の）実体験、④他者の体験、に分類できた。筆者らでKJ法を行った後、作問の内容を「自己の体験／他者の体験」の軸と「体験を再現／体験を発展」の軸の二軸で整理し図-4を作成した。KJ法は川喜田²¹⁾が提唱しているデータをまとめるために考察した手法である。

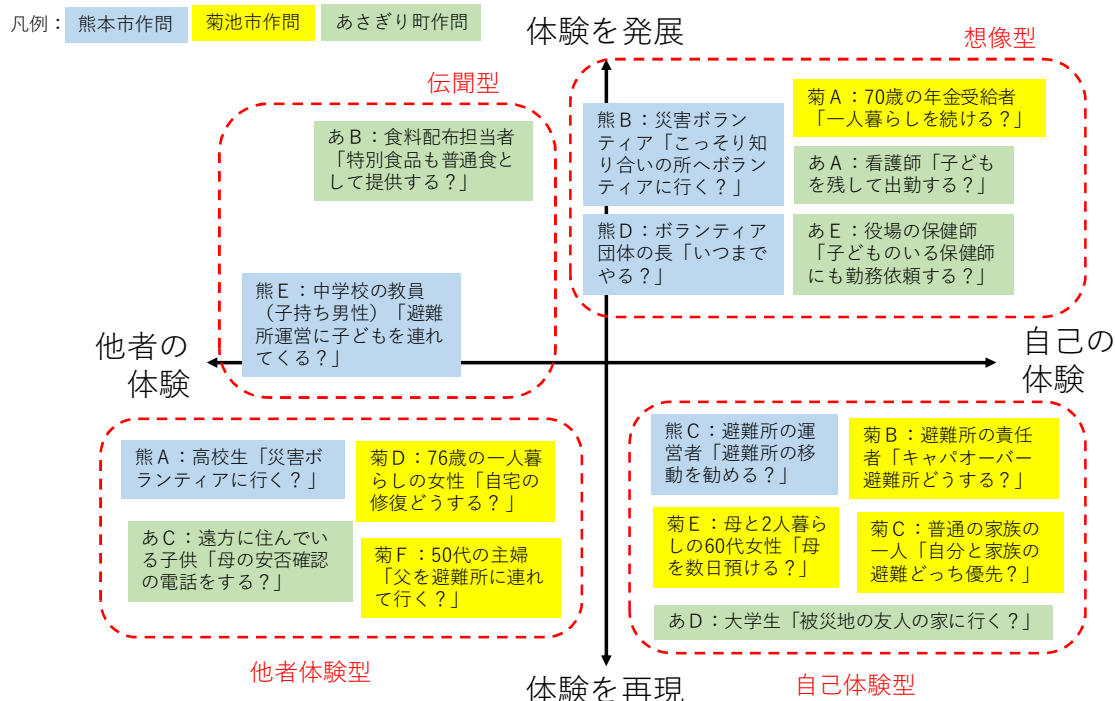


図-4 語り直された内容の分類

(2) 語り直しの特徴

語り直された記憶や経験を分析した結果、a) 自己体験型、b) 他者体験型、c) 伝聞型、d) 想像型の四分類ができることが分かった。それぞれの特徴を以下に示した。

a) 自己体験型：過去の自らの体験をもとに作成された問題。自分自身が体験した内容を抽象化しつつも、ジレンマを再現しようと作問されている。この作問では、過去の実体験を今語り直すことで、吐き出すこともできた。

b) 他者体験型：他者の体験をもとに作成された問題。過去の現場で直接共通体験して得られた内容が多く、一緒に避難した家族や友人など身近な存在の体験に基づくものが多い。過去に、自分が持ったジレンマではないが、今の時点で語り直すことで、他者への理解や、当時の判断を「自分ごと」として振り返ることができる。

c) 伝聞型：他者の体験をもとに作成された問題。過去の体験談やニュースなど、主体にとって印象に残っている出来事や話を、間接的に共有し作成された問題である。他者体験型との違いは、他者の体験を直接的に共有しているか否かであり、体験談やテレビやニュースはあくまでも情報でしかないので、あった出来事を伝えている。語り直すことで、自分に引き寄せて考える契機になる。

d) 想像型：自己や他者の体験をもとに、今後起こりうるジレンマとして作成された問題。実際に、体験したことがらではないが、情報を手がかりに、未来の自分の立場を踏まえて作成した問題や、現在の状況下から今後、災害が起こったときのジレンマを想像して作成された問題である。未来の自分を語り直している、と言える。伝聞型と想像型については、分類がしにくく、今回は作問の背景などを参考とした。

e) 語り直しの特徴

自己体験型と他者体験型では、実際に、被災経験がないと作問できない。自らが経験していることや、他者の迫られた選択を目の当たりにしていることが特徴として考察できた。伝聞型と想像型は、被災経験の有無に関わらず作問できることが分かった。伝聞型では、過去に聞いた他者の体験談やテレビやニュースといった情報を手がかりに、「自分ごと」にすることで、他人に伝えうる体験となる。想像型は、伝聞型の発展型でもあり、自己体験型の発展型ともいえる。単に自己の体験だけでなく、これから起きうる事象に備えて語り直すことから、未来の自分に伝えようと作問していると考えられる。

4. おわりに

本論文の結論を以下に示した。

クロスロード作問ワークショップにおいて、災害を契機とした記憶の語り直しについて分析した結果、語り直しをi) 自己体験型、ii) 他者体験型、iii) 伝聞型、iv) 想像型の四分類に分けることができた。

自己の体験に基づく語り直しと他者の体験に基づく語り直しでは、違いが見られた。また、過去の災害の教訓や様々な情報を学ぶことにより、これらの体験を「自分ご

と」として捉え直し、次の災害に備えるために語り直す、つまり人に伝えることは可能であることが分かった。つまり、語り直しという行為においては、語られる内容が自己の体験や他者の体験かということよりも、主体（語り手）が「災害に備えるため、記憶や経験を伝えたい」と意志を持って語り直すことが重要である。

謝辞：本研究では、熊本市、菊池市、あさぎり町においてクロスロード作問ワークショップに参加して頂いた皆様に、ご協力頂きました。記して感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 伊藤香織・紫牟田伸子（監修），シビックプライド研究会著：「シビックプライド—都市のコミュニケーションをデザインする」，宣伝会議，2008.
- 2) 伊藤香織，紫牟田伸子（監修），シビックプライド研究会著：「シビックプライド2【国内編】—都市と市民のかかわりをデザインする」，宣伝会議，2015.
- 3) 鈴木春菜，藤井聡：地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究，土木計画学研究・論文集，Vol.25，No.2，pp.357-362，2008.
- 4) 田中尚人・堀尾和美：「小学校地域学習におけるシビックプライド涵養に関する実践的研究」，実践政策学，Vol.2，No.1，2016.
- 5) 羽鳥剛史：地域コミュニティにおける離脱と発言に関する研究—A・O・ハーシュマンの離脱・発言理論の示唆—，日本都市計画学会 都市計画論文集，Vol.46，No.3，pp.991-996，2012.
- 6) Polkinghorne, D.E. Narrative Knowledge and the Human Science. New York, NY; State University of New York Press, 1988.
- 7) 野口裕二（編）：ナラティブ・アプローチ，勁草書房，2009.
- 8) やまだようこ（編），人生を物語る：生成のライフストーリー，ミネルヴァ書房，pp.1-38，2000.
- 9) 河合隼雄：心理臨床における「物語」の意義，精神療法 27，pp.3-7，2001.
- 10) Bruner, J. Acts of meaning. Harvard University Press, 1990.
- 11) 矢守克也：アクションリサーチ実践する人間科学，新曜社，2010.
- 12) 矢守克也：アクションリサーチ・イン・アクション共同当事者・時間・データ，新曜社，2018.
- 13) 矢守克也・李勇昕：「Xがない，YがXです」—疎外論からみた地域活性化戦略—，実験社会心理学研究，Vol.57，No.2，pp.117-128，2018.
- 14) 宮本匠：アクションリサーチの主体性形成について：新潟県中越地震の復興過程から，人間福祉研究，Vol.8，No.1，2015.
- 15) 矢守克也・杉山高志：「Days-Before」の語りに関する理論的考察，質的心理学研究，第14号，No.14，pp.110-127，2015.
- 16) 長田英史：場づくりの教科書，pp.20-21，芸術出版社，2016.
- 17) 矢守克也：アクションリサーチ・イン・アクション—共同当事者・時間・データ，新曜社，pp.164-167，2018年.
- 18) 熊本市ホームページ：熊本市市勢要覧 2015.
- 19) 菊池市公式ウェブサイト：<https://www.city.kikuchi.lg.jp>（2021年2月20日確認）.
- 20) あさぎり町公式ウェブサイト：あさぎり町平成28年11月発行.
- 21) 川喜田二郎：発想法—創造性開発のために，中央公論社，1967.

(2021. 2.24 受付)

A Study on Re-storying in Making Questions for Crossroad Games

Naoto TANAKA, Kosaku TAKARA and Hanami SAKAI

With the increasing severity and frequency of disasters, it is necessary to prepare for disasters on a daily basis. On the other hand, it has been five years since the Kumamoto earthquake in 2016, and there are concerns about the fading of memories. Memory transfer is an important activity in the process of disaster and recovery. However, it is difficult to carry out sustainable activities to pass on memories by simply preserving records in an archive. The aim of this study is to examine the significance of re-storying in order to pass on memories and experiences during disasters and the recovery process. Specifically, workshops on the "Crossroads" disaster prevention game for the Kumamoto earthquake are set up as a place for re-storying. Workshops were held in three municipalities in Kumamoto Prefecture, and the content of the questions were analyzed. The study found that re-telling can be classified into four categories, and that it is important for the subject to have the will to communicate.